多常城跡

第 90 次調査現地説明会 平成 28 年 9月 17日(土)午前 10:30~

宫城県多賀城跡調査研究所



図版 1 多賀城航空写真と調査区の位置(南西から)

@ はじめに

当研究所では昭和 44 年以来、特別史跡多賀城跡の発掘調査を継続して実施しています。近年は多賀城の外周りを囲む外郭施設の調査を進めており、今年度は坂下地区で外郭南辺の調査を実施しました(図版 1)。

多賀城跡第 I 期の外郭南辺は、第 II 期以降の位置よりも、約 120m 北側にあったことが近年の調査で分かってきています。

今回の調査は、低地から丘陵に上がる地点を調査し外郭南辺の規模・構造・変遷を解明することを主な目的としています。



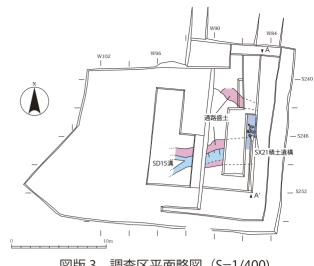
図版 2 第 1 期の外郭南辺と調査区の位置(南から)

② 調査成果

調査区内の地形は北西側が高く南東に向かって低く 傾斜しています。調査は、古代の遺構が最も良く残る とみられる東側を先行して掘り下げました。その結果、 以下のような遺構を検出しました。

- ①多賀城跡第 I 期の積土遺構とその基礎整地
- ②第 II 期以降の通路
- がはくしょくかざんばい ③灰白色火山灰降下(10世紀前葉)以降の井戸・畑の畝 また、出土した遺物には土器、瓦、木製品などがあり、 注目すべき資料として文字の書かれた檜扇が通路脇か ら出土しました。ここでは、主な成果として遺構の①

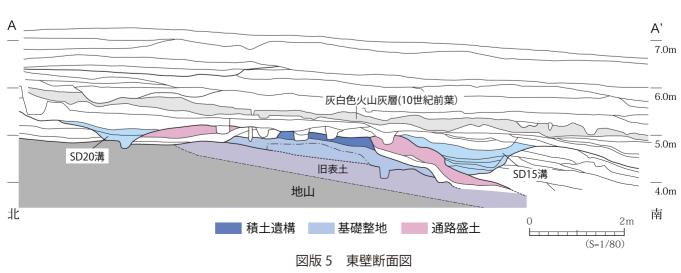
②と檜扇について説明します。



図版 3 調査区平面略図 (S=1/400)



図版 4 東壁断面写真(西から)



成果1 第I期の外郭南辺について

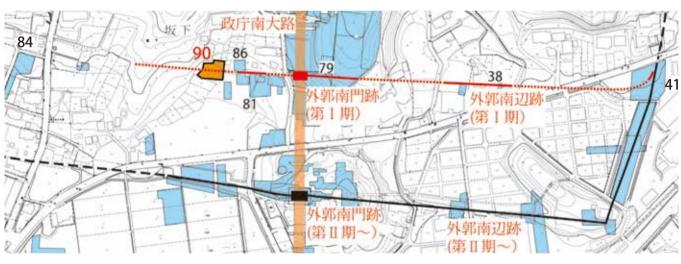
第Ⅰ期の外郭南辺となる積土遺構を調査区東端で 検出しました (図版 6)。 南北幅約 2.0m で高さは 約 20cm 残っており、黄褐色の土と黒色の土を交互 に平らに盛る方法で積み上げられています。その積 み方は「版築」と呼ばれる技法に似ており、築地塀 の可能性があります。積土遺構の下には、土台とな る基礎整地が南北幅約 4.5m の範囲に認められます。 厚さ 30~40cm の黒色土を中心とした土で、一部に は人頭大ほどの石が含まれています。

これらの遺構から、政庁南大路から西に約90mのところまで、 第 I 期の外郭南辺が延びていたことが分かりました。また、約 20m 東の低地における外郭南辺は、材木塀でしたが (図版 7)、今 回の調査で、西側の丘陵では築地塀である可能性が高まりました。





第86次検出の材木塀(西から)



図版 8 外郭南辺の位置

成果 2 第 || 期以降の通路について

第Ⅱ期に外郭南辺が南側に移動した後、その高ま りを利用してつくられた東西に延びる通路を検出し ました。これは、第86次調査で検出していた通路 の延長で、路面は見つかっていませんが両側に明褐 色の盛土を確認しています。南北の幅は 4~6m以 上で、西側の丘陵に向かって広がる形をしており、 時間がたち両側に土砂が堆積した後には両脇に側溝 が掘られています。通路が東側から西側の丘陵へ続 くことがより明確になり、未調査ですが、通路の先 の丘陵にはなんらかの施設の存在が想定されます。



第11期以降の通路(南西から) 図版 9

今回出土したのは、「骨(橋)」とよばれる複数の細長く薄い板材を重ねて綴じた、木製の扇です。重なり方や接合状況などから、11枚分あることが分かっています。第Ⅲ期以降に使われた通路の南側堆積層からまとまって出土しており、元は1つの扇だったと考えられます。また、両面には多くの文字が書かれています(図版12・13)。

骨の長さは 24.6~28.5cm で長さに違いがあり、先端を斜めに切ったものや、比較的平らなものがあります。幅は 2cm~3.5cm で、手元から先端に向かって徐々に広くなり、側面を浅く抉って整形しているものもあります。厚さは 1~2mm で、手元には 作なめあな の要孔があります。

文字の内容は解読中で、同じ文字を続けて書かれた所は、役 しゅうしょ 人が文字の練習をした習書とみられます。また、文字は骨の左 側に寄ったものが多くみられますが、右側に寄るものもあり、 扇の開き方と関連すると考えられます。送風具以外の、当時の 扇の使われ方を考えるうえで重要な資料といえます。



図版 10 出土状況(南西から)



図版 11 出土した状態の檜扇

檜扇は、県内では山王遺跡(多賀城市)、熊の作遺跡(山元町)に出土例がありましたが、文字が書かれた 檜扇は県内では初めての出土で、貴重な発見となりました。



図版 12 檜扇の名称と復元イメージ (『奈良国立文化財研究所 1985』に一部加筆)

図版 13 出土した扇の復元イメージ (S=1/3)

- ・第 I 期の外郭南辺を政庁南大路から西に約 90m の箇所まで確認しました。低地では材木塀であることがわかっていましたが、西側の丘陵では築地塀である可能性が高まりました。
- ・第Ⅱ期に外郭南辺が南側へ移動した後、第Ⅰ期の外郭南辺の高まりを利用した通路を確認しました。通 路の先にある西側の丘陵に、実務官衙のような何らかの施設の存在が想定されます。
- ・県内で初めてとなる文字の書かれた檜扇を発見しました。地方官衙での文字が書かれた檜扇の出土は全 国的にも貴重です。文字が多数書かれていることに加えて扇の形状も良く残っており、全体の構造や当時の 使用方法を知るうえで重要な発見といえます。

【参考文献】

奈良文化財研究所 2010「檜扇」『平城京事典』pp 177-178

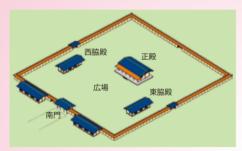
奈良国立文化財研究所 1985 奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊『木器集成図録 近畿古代篇』

たがじょうあと

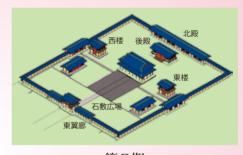
-多賀城跡について-

はつ こくふ 特別史跡多賀城跡は、奈良・平安時代の中央政府が陸奥国を治めるために置かれた国府の跡で、奈良時代には ちんぺい ちんじゅふ りょう ちんじゅう は兵という兵士を統率する鎮守府も置かれていました。

これまでの政庁跡の発掘調査によって、多賀城の変遷は考古学的に第 I 期から第IV期までの 4 時期に大別できることが明らかになりました。この変遷は、城内の他の地区の遺構をみる際にも有効です。



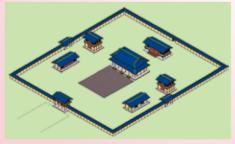
第 I 期 じんき てんびょうほうじ 神亀元(724)年 創建~天平宝字6(762)年 修造



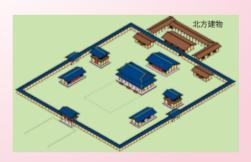
第 II 期

ほうき

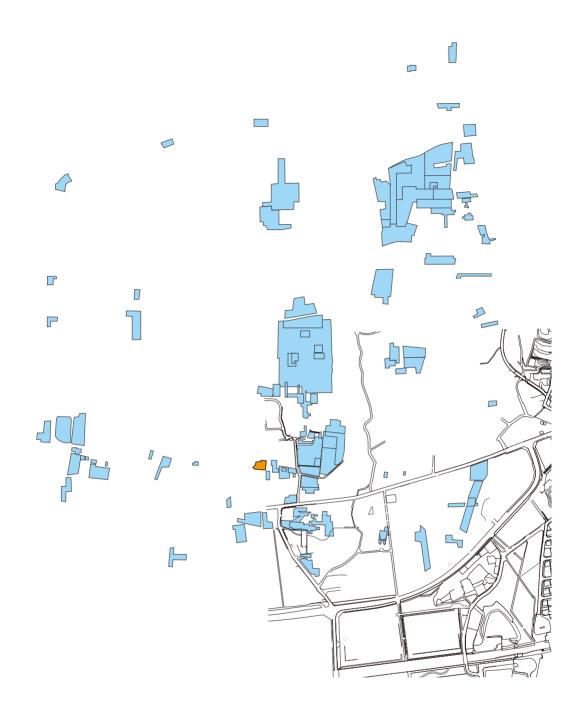
てれはりのきみあざまろ
天平宝字6(762)年 修造~宝亀11(780)年 伊治公呰麻呂焼討



第Ⅲ期 じょうがん 宝亀11(780)年 焼討~貞観11(869)年 陸奥国大地震



第IV期 貞観11(869)年大地震~11世紀中頃



調査要項

所 在 地:宮城県多賀城市市川字坂下地内

調查指導:多賀城跡調查研究委員会(委員長 佐藤 信)

調查主体:宮城県教育委員会(教育長 髙橋 仁)

調查担当:宮城県多賀城跡調査研究所(所長 須田 良平)

調查協力:多賀城市教育委員会

調 査 員: 須田 良平・吉野 武・三好 秀樹

白崎 恵介・廣谷 和也・高橋 透

調査期間:平成28年5月23日~平成28年9月(予定)

調査面積:約 430 m